

# 2008 年度 政治外交史 I 期末試験講評



今回の問題文は下記の通りでした。

満洲事変（1931年9月18日～1933年5月31日）の経緯と、各国（日本・中国・米国・英国）の対応について説明しなさい。なお説明に際しては、以下の語句をすべて用いること。

リットン報告書      上海事変      塘沽停戦協定      朝鮮駐留日本軍      錦州爆撃

## 1. 答案の作成方法について

最初に、どのような手順で答案を作成すべきだったか、私が補講で教授した手順に即して、見てゆきます。

①問題文を読み、出題者の意図を理解する。

I. 今回の出題の核心は「満洲事変の経緯と、事変に対する各国の対応を説明せよ」です。それ以外は、解答のためのヒントか、または附随条件にすぎません。

したがって、そもそもこの双方（満洲事変の経緯と、事変への各国の対応）について、触れられていない答案は、出題の意図を理解できていないとして、大幅に減点せざるをえませんでした。

II. また解答に際しては、「日本」「中国」「米国」「英国」の4か国の対応すべてに言及する必要があります。この条件を充さず、たとえば日本と中国の対応のみを書いたような答案も、それなりに減点しました。

III. なお満洲事変そのものは、問題文にもあるように1931年8月から1933年5月におきていますが、1928年の張作霖爆殺事件や、1931年3月の「三月事件」など、その前段階となる事件について、付随的に触れるのは構いません。もちろん、触れなかったからといって減点することはありませんでした。

②必要と思われる論点を（紙に）書き出す。

I. 上記の通り、答案において必ず言及すべき論点は

a. 満洲事変の経緯（発端・途中経過・結末）

b. 日米中英の四か国の事変への対応、ならびに事変の各段階における態度の変化

の2つです。レジュメでいうと a. については75ページの下半分～76ページを文章にまとめればよいわけです。また b. については78ページから79ページの内容を正しく要約できれば、十分に合格答案となります。

II. さらに73ページから75ページの上半分の内容を「事変の背景」とし、79ページ後半以降を「事変後の動静」として要約すれば、さらに答案としての完成度は高まりますが、そもそも出題の内容には含まれない部分ですから、書かなかつたからといって減点されるわけではありません。また、あくまでも

I. の内容を補足する程度にとどめなければなりません。

III. なお、答案用紙の裏や端の方に、メモが残っていた答案については、一応チェックをしました。このメモが良くできているものについては、とくに裁量点を附加した例もあります。

③答案全体の論理構成を組み立てる。

この点については、きちんと段落わけができているか、全体としてまとまりのある構成となっているか、といった面からチェックしました。思い付くままにダラダラと書き並べたような答案は、当然ながら減点しています。

なお今回の問題についていうと、「最初に事変の経緯について説明し、そのあとで、各国の対応に一括して言及する」形式と、「事変の流れを説明するなかで、随時、各国の対応について言及してゆく」方法の2つが考えられます。これはどちらでも構いませんので、自分の書きやすい方で、構成を組んでください。

④実際に答案を書く。

(省略)

⑤きちんと読み直し、おかしな所がないかチェックする。

I. この作業をきちんとすれば、誤字や脱字などはかなり減るはずなのですが、誤字を理由に、減点した答案も少くありませんでした。もったいない話です。

II. また、日本語として意味が通っていない答案も、複数枚見つかりました。これも一度、最初から読み直してみれば、すぐに気づくはずなのですが。

あくまで推測ですが、2回の補講にきちんと出席し（あるいは自分で録音などをチェックし）、まじめに努力した学生は、それなりの答案が書けていたようです。しかし、これらの努力を怠った（あるいは努力の形跡がまったく見られない）学生については、点数のつけようがない、悲惨な答案が数多く見られました。

そもそも、事前に「日本が関与した戦争または事変について出題する」と予告していたわけですから、満洲事変が出題されることは十分に予想できたわけで、きちんと準備していたかどうかで、点数の面でも明暗がはっきりと分れたように思われます。

## 2. 期末試験の採点について

①採点に際しては、最初に下記の諸点に留意しつつ、大まかなチェックを行いました。

I. 設問に対して、きちんと解答をしているか。

→問題文をきちんと読めていない答案は、大きく減点しています。また、満洲事変の経緯についてだけ、あるいは各国の対応についてだけ書いてある答案も何枚もありました。これも題意を満たしているとはいえませんので、大きく減点しています。

II. 論旨の明快さや論理性が、大学生にふさわしい水準に達しているか。

→読んで「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答案は、大きく減点しました。また、段落分けがきちんとなされず、ダラダラと改行もなく書き続けている答案も、減点の対象としました。心当りのある人は、もう一度補講の内容を思いだし、「答案構成（設計図）」をきちんとしてから、答案を書き始めるようにして下さい。

②つぎに、以下のようなポイントをきちんと押えているか、チェックしました。

I. 必要な論点が揃っているか。

a. 満洲事変の経緯（発端・途中経過・結末）について

b. 日米中英の四か国の事変への対応、ならびに事変の各段階における態度の変化

本来なら、この双方がそろっていなければ不合格なわけですが、実際には「大幅減点」に留めています。

ほかに問題に示した5つのキーワード（リットン報告書・上海事変・塘沽停戦協定・朝鮮駐留日本軍・錦州爆撃）がすべて揃っていても、それだけで不合格にはしていません（減点はしました）。

また各国の対応に関して、錦州爆撃や上海事変を境とした英米両国の態度の変化にもきちんと言及しているか、といった点にも留意して採点をしました。

II. 解答の分量が不足していないか。反対に無駄な記述が含まれていないか。

試験時間は80分あるわけですから、それなりに分量が書かれていないと、全体としての評価はさがります。また反対に、出題と全く無関係の事柄がいろいろ書かれている場合も、やはり評価は下がります。

「書いて置けば損にはなるまい」と考えたのかもしれませんが、結局「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答案に近くなるだけですので、全体としての印象は悪くなるだけです。「求められる知識を、論理的に、かつ過不足なく書く」ことを心掛けて下さい。

ちなみに書き終わっていない「未完結の答案」も、採点はしましたが、それなりに減点してあります。

### III. 「基本的なミス」を犯していないか。

→とくに目についたのが（満洲事変を起した）関東軍と朝鮮駐留日本軍を混同した答案です。また柳条湖事件と盧溝橋事件を取違えた答案もみられました。とくに後者は、講義でも繰り返し説明したはずなので、ちょっと残念でした。さらに張作霖爆殺事件が満洲事変の直接の契機であると勘違いした答案も複数枚みられました。このような基本的なミスについても、すこし大きめの減点をしています。

- ③最後に、誤字脱字など、形式的なミスについてチェックをし、あまりに酷いものについては減点しました。こう書くと必ず、「読めればいいのではないですか」といいだす学生が出てきますが、それでは同じように、誤字脱字だらけの履歴書やエントリーシートを、就職活動で提出したら、どういう結果になるかを考えてください。試験中は辞書を引けないので、ある程度までは大目に見ていますが、あまりに酷いものは、減点の対象としています。
- ④その後、加減点や裁量点なども合算して、最終的な成績を算出しました。答案がボロボロでも、加減点のおかげでA評価になった人がいる一方、答案そのものは素晴らしいのに、加減点によりCになってしまった人もいます。したがって、成績表にAがついていたとしても慢心せず、またCだったとしてもガッカリせず、今後もよい答案が書けるよう、精進して下さい。
- なお自分の答案について、より詳しいコメントや指導を希望するひとは、[sito2008@teabreak.jp](mailto:sito2008@teabreak.jp) まで連絡をもらえれば随時対応します。
- ただし成績の変更（確認）を要求するのであれば、かならず正式な「成績確認制度」の方を利用するようにしてください（直接連絡をもらっても、制度的に対応することができません）。

## 3. 成績分布について

- ①履修登録者全体（講義に一度も出席しなかった者も含む）における成績分布  
A：23.9% B：8.7% C：13.0% X：25.9% 無資格・欠席：28.5%
- ②期末試験受験者における成績分布  
A：33.5% B：12.2% C：18.1% X：36.2%